

弥生時代における影響関係について

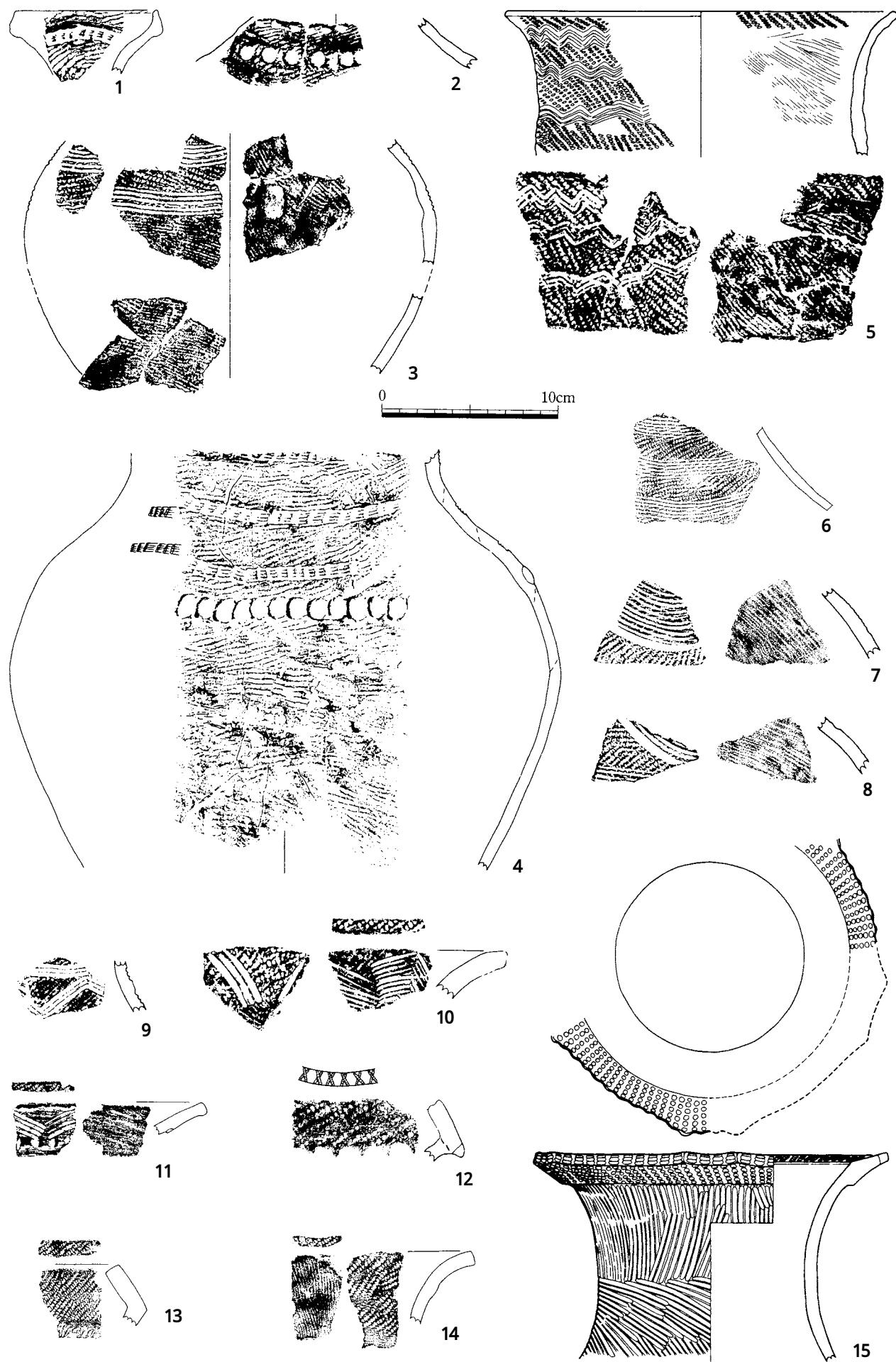
久田正弘

1.はじめに

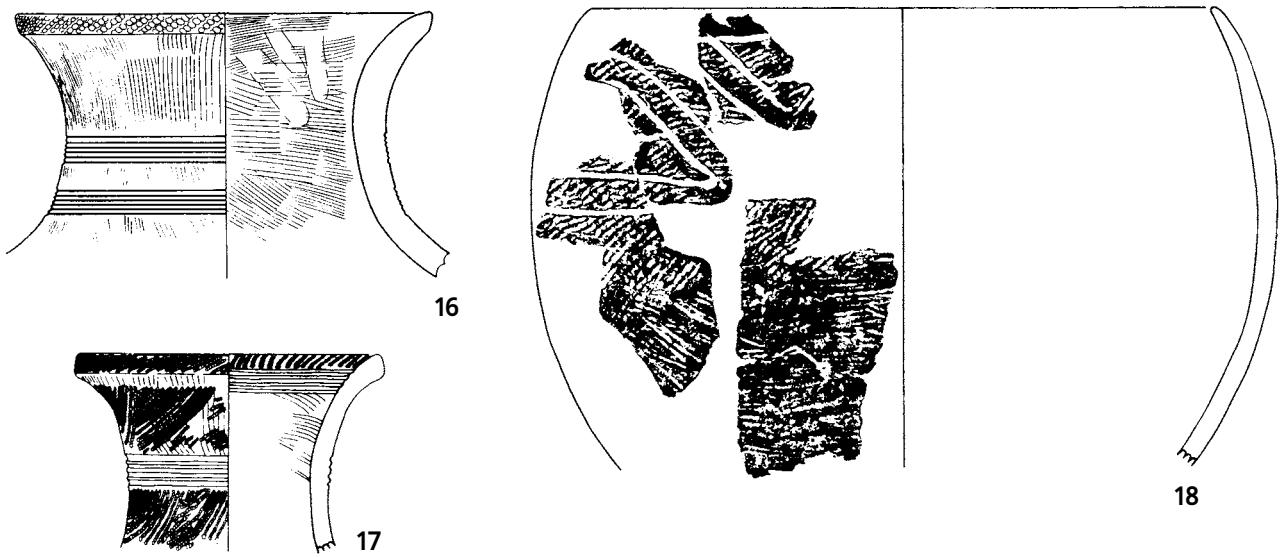
北陸地方西部の弥生土器は、西日本各地の影響のもとで独自の発達が見られる。弥生時代前期条痕文系土器群は、西日本・東海地方西部系土器群の影響を受けながら、北陸3県独自の土器群が存在している。その独自な土器群は、弥生時代中期になると一期では浮線文系浅鉢群が消滅し、二期では条痕文系土器群の消滅が認められる。その過程における土器群間の影響関係を石川県の事例から紹介したい。また西日本系の土器群などについても、新資料を紹介したい。

2.条痕文と櫛描文の関係

条痕文系土器と櫛描文系土器の影響関係を窺える資料は、北陸3県では福井・富山県では資料が少ないために不明であるが、福井県でも存在したような記憶があり、未報告資料の公表や資料の蓄積を待ちたい。石川県では能登～南加賀地方まで出土しているが、小松市八日市地方遺跡の土器はまだ未公表なので、詳細は不明であり、北加賀地方以北の状況で論じてみたい。第1図1～5は山王丸山遺跡出土である（的場ほか1994）。1は条痕文壺であるが、地文に撚糸を持つ。2・4も条痕文壺であり、指頭による刺突文を持つが、地文に撚糸を持つ。4は太頸の壺であり、円形で中空の工具を束ねた櫛による簾状文を持つ。3は櫛描文壺であり、内外面下半は細いハケ、内面上半はやや粗いハケ調整である。櫛描文の間に縄文を充填する。5は条痕文壺であるが、口縁部内面と外側は縄文を施し、櫛による山形文を持つ。6は富来町高田遺跡出土（橋本ほか1999）の櫛描文壺であり、櫛描直線文を単体構成で施し、櫛描文の間に縄文を充填する。高田遺跡出土土器などの縄文施文は、東日本系の土器群の影響が想定され、「東西両文化圏交流点として土器製作上の技法においても混交が著しい」例とされている（橋本1975）。7～16は羽咋市吉崎・次場遺跡出土である（福島ほか1987）。15はN-2号土坑出土であり、遠賀川式系土器と櫛描文系土器と条痕系土器群が出土し、一期前半である。太頸の条痕文壺であるが、口縁部を内外に肥厚させており、5ないし6単位の波頂部であり、波頂部に凹を持つ。この土器は口縁形態（内面肥厚、多角形口縁、波頂部形状）が大地型壺（江崎1956・紅村1979）の特徴を持っている。7～14はW区包含層出土である。7・8は同一個体（一部改変）であり、内面は粗いハケ調整の櫛描文壺である。外側は粗いヨコハケ調整後に断面円形の沈線で円形文を描き、その内側を櫛で円形文を描いており、文様施文後に縄文を充填する。8は円形文の下側に櫛描直線文があるようである。円形文は阿島・須和田式系の文様と判断していたが、渦巻文土器（神村1988）の系譜を引いた文様と判断したほうが妥当であろう。よって、櫛描文壺に渦巻文壺（円形文）と大地型壺（縄文）との特徴を持っており、総称して沈線文壺（服部1992・永井1994）の影響を持った土器ある。この土器の類例は小松市八日市地方遺跡で出土しているが、櫛描文系壺であるかは検討を要するようである（福海氏教示）。9は内面がナデ調整であり、厳密には条痕・櫛描文系のどちらの壺であるかはやや判断に苦しむ土器である。山形文は山王丸山遺跡では、条痕文壺と壺（5）に多く認められるが、櫛描文壺でも存在する。9は直線文と山形文が組み合わされており、櫛描文壺の可能性が高い。この土器は櫛か条痕（櫛描文・条痕文壺）による文様と縄文が組み合わされる。10は条痕文壺の口縁部と思われ、縦羽状条痕を持ち、口縁部内面と口唇部に縄文を持つ。口縁部内面には外側の羽状条痕より太い幅の工具による文様を持つ。11も条痕文壺であり、外側を低い貼付突帯により肥厚させる。突帯には山形文を施し、下端には刻みを持ち、口唇部に縄文を持つ。12は櫛描文壺であり、第52図391（福島ほか1987）であり、一部改変した。受口部下半と内面はハケ調整であり、



第1図 条痕文と櫛描文の関係土器 1



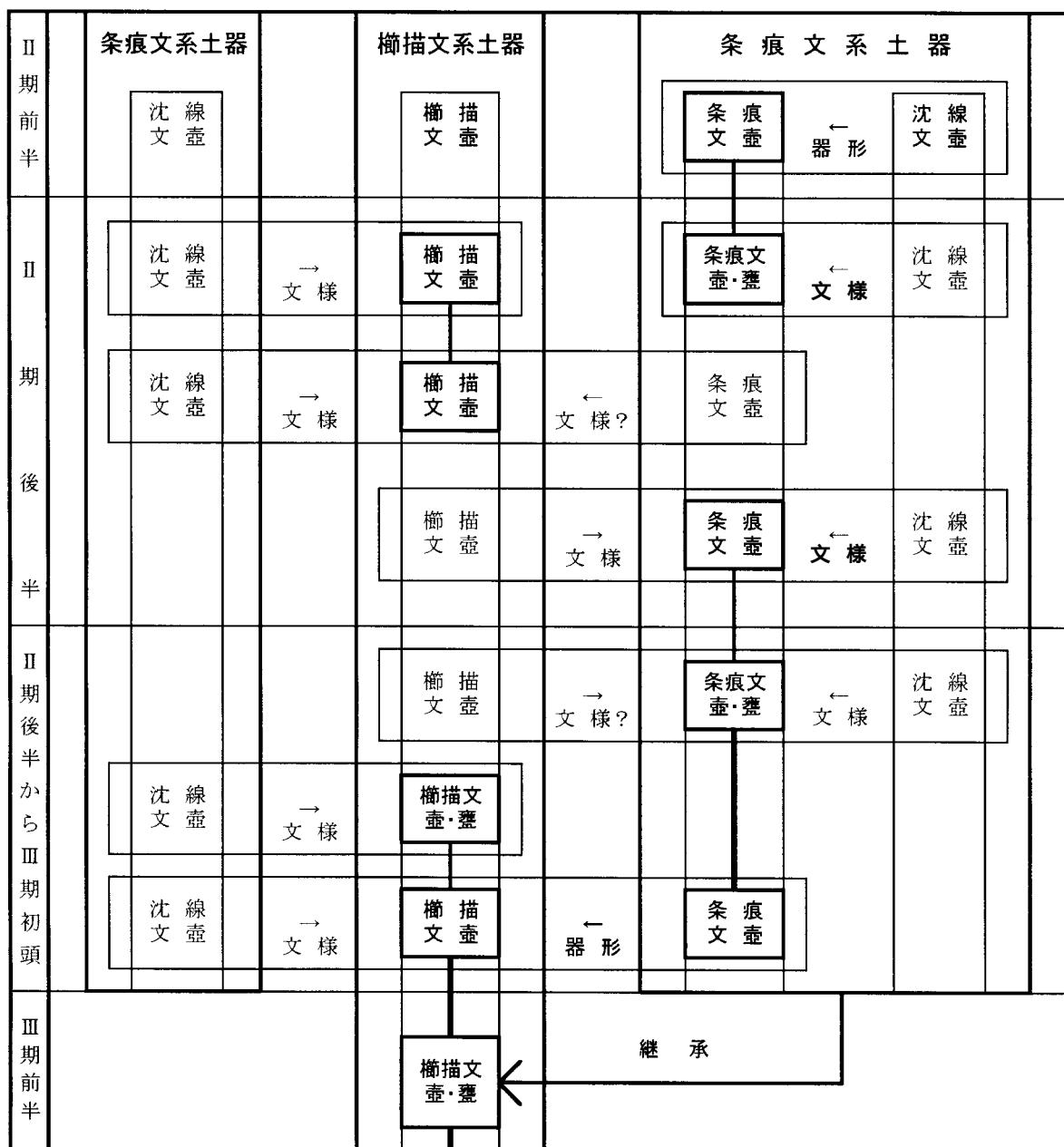
第2図 条痕文と櫛描文の関係土器 2

櫛 描 文 龫		沈 線 文 壺		条 痕 文 龫	
II 期 前 半	主 流	主 流		主 流	
II 期 後 半			文 様		
II期後半からIII期初頭	 文 様	 文 様		 文 様	
III 期 前 半					

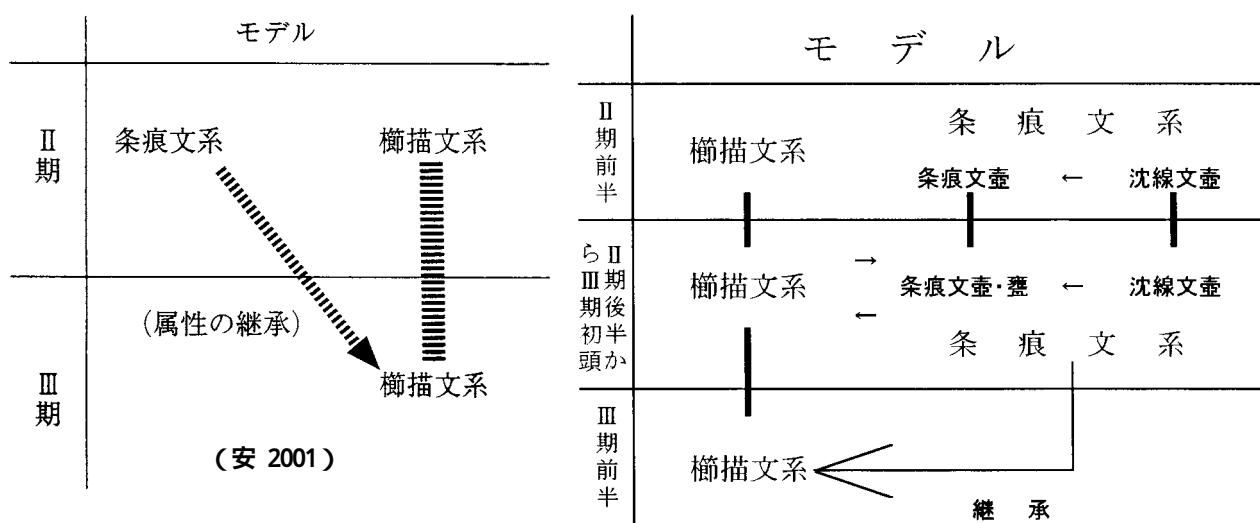
(1/8)

第3図 影響関係図 1

第4図 影響関係図2



第5図 影響関係図3



第6図 装飾的属性などの変化・継承モデル案

口唇部の刻みもハケのようである。受口部外面には縄文を持つ。13も櫛描文系の受口壺であり、口縁部と口唇部に縄文を持つ。よって、12・13は櫛描文壺であるが、条痕文壺の口縁形態(器形)を持ち、口縁部に沈線文壺の文様を持つ。14は櫛描文壺であり、口縁部内面と口唇部に縄文を持つ。16はV-5号溝出土の太頸の櫛描文壺であり、櫛描文は単体構成であり、口唇部に縄文を持つ。第2図17・18は金沢市矢木ジワリ遺跡出土である(増山1987)。17は櫛描文壺であるが、ハケ調整のち外面と口縁部内面に縄文を充填する。また、口縁部内面には櫛による直線文を巡らせており、受口状口縁を持つ条痕文壺の口縁部内面文様と共通する。18は条痕文深鉢であり、条痕調整であるが胴部上半まで縄文を持つ。

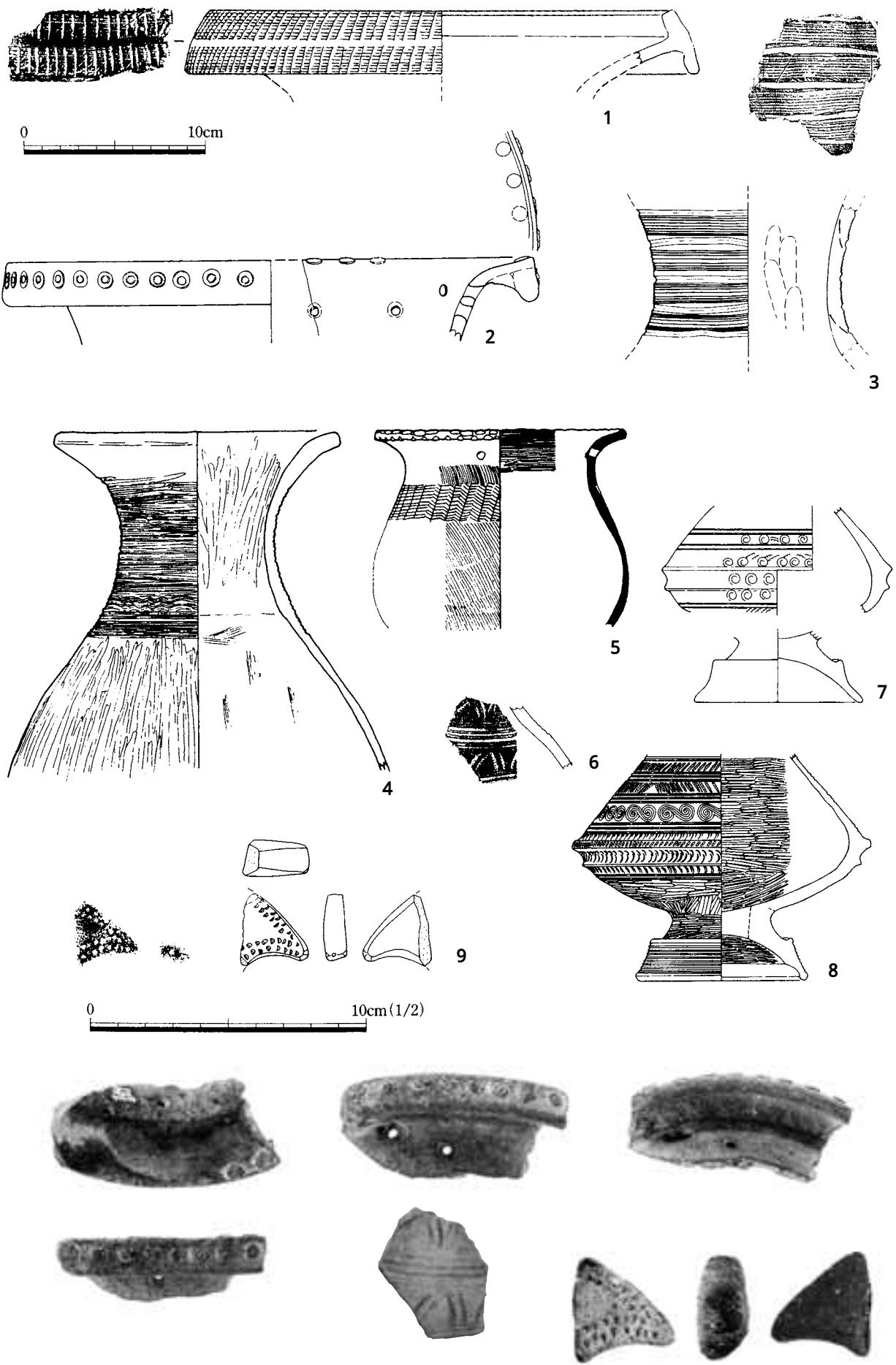
第1・2図の土器はおおむね 期後半から 期前半(1)(的場・久田ほか1994)であるが、包含層資料が多いために、明確な時期は確定できないものが多い。16は増山編年3期の基準資料(増山1989)であるが、櫛描文が単体構成であることや縄文を持つことからやや古相と思われる。期前半は吉崎・次場遺跡N-2号土坑を基準とし、期後半は山王丸山遺跡包含層、吉崎・次場遺跡J・W区包含層、矢木ジワリ遺跡などを基準とする。期後半～期初頭は山王丸山遺跡包含層、吉崎・次場遺跡J・W区包含層・V-5号溝、下安原遺跡101号溝を基準とし、八日市地方遺跡5・6期に併行するものと考えている。期前半は、吉崎・次場遺跡V-5号土坑、金沢市寺中遺跡周溝を持つ建物(宮本1977)などを基準とし、期前半は斜行单線文が一部に存在することから、従来の期前半の中でもやや新しい可能性(八日市地方遺跡7期併行)が指摘できるものと思われる。上記の関係を時期と系統で分類すると第3・4図となる。壺は各系統とも主流が存在するが、条痕文系土器群の壺において、期前半に粗製壺(条痕文壺)に精製壺(沈線文壺)の器形が採用(第1図15)され、期後半には条痕文壺に文様の採用(縄文)が認められる。沈線文壺文様の採用は、櫛描文壺(3)でも同時期に認められる。また4は縄文と簾状文を持つので、条痕文壺に沈線文・櫛描文壺の文様が採用されている。17は櫛描文壺に沈線文壺の文様が採用され、その上に条痕文壺の文様も採用された可能性がある。これらの他系統壺文様の採用は、条痕文系土器群の消滅により確認されなくなる。

12・13は沈線文壺の文様を採用した櫛描文壺であるが、器形は条痕文壺の口縁形態を採用している。受口状口縁を持つ櫛描文壺は、八日市地方遺跡では期後半で出現(福海氏教示)しているようであり、能登地方でも同時期に出現した可能性もあるが、現在能登地方の資料では期後半～期初頭としか判断できない。この受口状口縁壺は、期になると北陸地方の主要壺となり、条痕文壺の太頸も継承しており、太頸は受口状口縁を持たない櫛描文壺にも継承されるようである。口縁部文様は、ハケによる綾杉文であり、期後半のヘラによる綾杉文(条痕文壺の文様)を継承している(安2001)。

今回の問題については、期に条痕文系土器と沈線文系土器との間で装飾性の一体化が進み、期には櫛描文系土器に条痕系の器形・文様の属性が継承(第6図左)されるという独自な動き=「北陸型」が既に提唱されている(安2000・2001)。基本的には筆者も同じであるが、期前半に条痕文土器群において条痕文壺に沈線文壺の文様が採用=壺における文様規範の一部崩壊が始まり、期後半には文様規範崩壊が、条痕文系壺群のみならず、異系統である櫛描文壺との間でも一部行われ、この影響は別器種の壺にまで及んでいる。この同一系統内での文様施文規範の一部崩壊(融合化)が、異系統土器群の枠を超えた結果(第5図)、期の櫛描文系土器に条痕系土器の器形・文様の属性への継承(安2000・2001)が容易になされたものと判断する(第6図)。

3. 生駒西麓産の土器の紹介

最近になり、北陸地方でもいわゆる生駒西麓産土器が若干ではあるが確認され始めたので紹介を行う。第7図1は、富山県氷見市大境洞窟第5層出土の期後半(凹線文出現期)の壺であり、色調は



第7図 西日本との関連遺物

黒褐色であることや器形や文様からも大阪府東部地域（上野ほか2002）であろう。河内 1・2 様式（寺沢ほか1989）に併行すると思われる。2は、羽咋市吉崎・次場遺跡W4区出土である。実測番号86404で報告書に掲載されなかった資料である。原図を一部改変し、ここに掲載した。色調は褐色であり、非常に多くの角閃石を含む生駒西麓産土器である。復元口径28.6cmの壺であり、外面は横ミガキ調整であるが、口縁部の外反する部分がやや荒れている。口唇部に円形浮文を持ち、半截竹管で円文を施文する。円文内には赤彩痕が見られるので、全体に赤彩されていた可能性があろう。内面には2個の円形浮文が存在し、1個の剥離痕が明瞭に存在する。円形浮文は本来内側全部に存在した可能性があろう。大きく開く口縁部の外側に粘土を貼り付けて拡張する。補強のために内側に粘土を貼り付けて指頭によるオサエを右回りで行う。外面には3箇所の補修孔があり、共に内外面から穿孔されている。一番左側は内側に貫通する部分以外に3箇所の穿孔痕が残っている。河内 0・1 様式に併行するものと思われる。また、吉崎・次場遺跡には、胎土的には生駒西麓産ではないが、期前半のN-2号土坑で和泉 0 様式に特徴的に見られる「付加条を持つ櫛描き直線文」（樋口1990）を持つ壺（第7図3）が出土している。8条の櫛で右周りに施文した後に断面円形の沈線を施文する。胎土は、赤・黒・灰・白色のチャートないし流紋岩が主体であり、石英や長石を少々含むが角が取れて丸くなっている。よって、石英・長石主体でないので、和泉地方や吉崎・次場遺跡で作られた可能性が低いと思われる。搬入にしてもチャート・流紋岩を主体とする地域からであり、吉崎・次場遺跡の遠賀川式土器と同様に滋賀県湖東地方から若狭地方にかけての地域（久田2001）と考えられる。

さて、大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡遺跡では第 様式古相の土器と共に北陸系土器第7図4（若林ほか1992）が出土し、胎土的に近畿地方のものではなく（久田1999）、福井平野で製作された可能性が高い。東大阪市瓜生堂遺跡（今村ほか1981）では河内 2 様式に搬入された壺（第7図5）は、南信濃地方の恒川式の影響（寺沢ほか1989）よりも北陸地方からの搬入と考えたい。よって、北陸地方の土器が大阪湾周辺に搬入され、また北陸地方にも生駒西麓産土器などの搬入を前提として、土器の観察や抽出を行う必要があろう。しかし、個体数はあまり多くは無いと想定できそうである。

4. タマキ貝文様の紹介

6は吉崎・次場遺跡83年V 5溝覆土（黒粘）出土土器である。壺の胴部上半部分であり、縦ハケ後文様を施した後に、横方向の軽いナデを入れる。二枚貝による貝殻腹縁文を2つセットで、櫛描文の間に山形状に施文する。腹縁の外側に凹凸が見られないので、タマキ貝の可能性があろう。タマキ貝文様は、山陰地方の遠賀川式土器や後期の装飾壺に類例があり、後者は野々市町押野タチナカ遺跡（横山ほか1989）で7・8や小松市平面梯川遺跡で出土している。6の出土遺構は 期末～期初頭であり、直接的な系譜は引けないがタマキ貝腹縁文の使用は、山陰地方との交流の結果であろうか。

5. 分銅形土製品の紹介

石川県では分銅形土製品の出土例も多く、現在能登地方では羽咋市吉崎次場遺跡4点、東的場タケノハナ遺跡3点、北加賀地方では金沢市戸水B遺跡4点、藤江C遺跡1点、松任市横江古屋敷遺跡1点、南加賀地方では小松市八日市地方遺跡10点、大長野遺跡1点、加賀市猫橋遺跡3点を確認している（未報告分を含む）。第7図9は羽咋市吉崎次場遺跡84年調査W8区出土であり、3点報告された同じ調査（福島ほか1988）で出土したものである。細い竹管か茎による刺突を2列施文する頭部の破片である。下側の刺突文は右上から、頭部上側に刺突文は右下から行われている。頭部角には中央部には同じ竹管による刺突か石が剥離したのか判断に苦しむが、浅い穴が存在する。表面はくすんだ灰白色であり、裏面は灰色である。先端側は厚さ9mmであり、破面側は12mmであり、中央部が少し厚くなっている。胎土は黒・白色チャートを多く含み、石英（クリスタル）を長石も含んでおり、搬入

の可能性もあるが、破片が小さいので限定するのは難しい。吉崎次場遺跡の土器の大部分は、石英・長石主体であり、他の3個体も混和材的には石英・長石主体であるので、現状では他地域からの搬入品の可能性を積極的には論じる事は出来ない（久田1996）のが現状である。

6. おわりに

今回は、一期前半において、規範の一部崩壊から始まった条痕文系土器群内での変化が、やがて櫛描文系土器群にも影響が及んだことを明らかにした。この異系統土器間の影響関係は、条痕文系土器群の消滅を促す要因の一つとなり、また条痕文系土器の属性が容易に櫛描文系土器に継承（安2001）される下地を作ったと思われる。しかし、条痕文系土器群の変化（規範の崩壊）は、西日本を中心とした櫛描文系土器群の影響によって発生したものと考えている。また時期は違うが、西日本との関係を考える上で重要な未報告資料の紹介を行った。今後、各方面からの御教示・批判・指導などを頂きたい。なお赤澤徳明・伊藤雅文・上野章・田崎博之・林大智・福海貴子・松尾実・安英樹・湯尻修平・横山貴広・吉田淳氏から、教示や資料提供を受けたことを感謝いたします。

参考文献

- 今村道雄・曾我恭子編 1981 『瓜生堂遺跡』 瓜生堂遺跡調査会
上野 章・大野 研 2002 「大境洞窟遺跡出土遺物(2)弥生土器」『氷見市史 7 資料編五考古』 氷見市
江崎 武 1965 「所謂大地式土器の再検討」『いちのみや考古 No 6』 一宮考古学会
神村 透 1988 「浮線渦巻文土器」『条痕文系土器文化をめぐる諸問題 資料編・研究編』愛知考古学談話会
紅村 弘・増子康真ほか 1979 『東海先史文化の諸問題(資料編)』
寺沢 薫・森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編』 木耳社
永井宏幸 1994 「沈線紋系土器について」『朝日遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
橋本澄夫 1975 「弥生土器 中部 北陸2」『考古学ジャーナル107号』ニュー・サイエンス社
橋本澄夫ほか 1999 『高田遺跡』 富来町教育委員会
服部信博ほか 1992 『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
久田正弘 1996 「北陸地方と他地域の関係1」『YAY!』弥生土器を語る会
久田正弘 1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌 第92号』 長野県考古学会
久田正弘 2001 「北陸地方の木目沈線文と遠賀川式土器について」『石川県埋蔵文化財情報 第6号』石川県埋蔵文化財センター
樋口吉文 1990 「和泉地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編』木耳社
福島正実ほか 1987 『吉崎・次場遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
福島正実ほか 1988 『吉崎・次場遺跡(2)』 石川県立埋蔵文化財センター
増山 仁 1987 『金沢市矢木ジワリ遺跡 矢木ヒガシウラ遺跡』 金沢市教育委員会
増山 仁 1989 「小松式土器の再検討」『北陸の考古学』石川考古学研究会
的場勝俊・久田正弘ほか 1994 『山王丸山遺跡』富来町教育委員会
宮本哲郎 1977 『金沢市寺中遺跡』 金沢市教育委員会
安 英樹 2000 「北加賀における弥生時代中期前半の土器編年と変遷過程」『中部弥生時代研究会会誌第1号』 中部弥生時代研究会
安 英樹 2001 「北加賀における弥生時代中期前半の土器編年と変遷過程」『考古学フォーラム13』 考古学フォーラム
若林邦彦・濱田延充ほか 1992 『高宮八丁遺跡』 寝屋川市教育委員会
横山貴広ほか 1989 『押野タチナカ遺跡 押野大塚遺跡』 野々市町教育委員会